

余白を寝かせて ● 齋賀万智

いつもよりはよい鼓動を抱きしめて男子校へと赴任する春
躍動感満ちる廊下に足を止め男子校とう空気吸い込む

教員に女性はふたり 簡単にマイノリティの側に立つ四月
少しでも意見述べれば私はすぐに女性の代表となる

ノイズかもしれない私 静まった水面をそつと震わせている

目を合わすことを忘れた初授業空気は不安そうに揺らめく
働くという選択肢しかない乾いた声で中三は言う

「男の子だから」に潜むかなしみをかなしみとして受け入れてゆく

のびのびと育ちゆく子ら 無造作に脱がれた体操服を見て思う

胸奥にしまわれていた言の葉が叫びとなったロッカーのへこみ

はつなつの匂いの風が教室を走りまわっているような午後

君が君らしくあるため呼び方は「くん」ではなくて「さん」づけにする

今はまだくつきり見える境目に白を含ませやわらかくする

「あさが来た」あ音で笑う君だから今日の続きを知りたいと思う

これからをともに描いてゆくために余白はしるく寝かせておいて



受賞の言葉—— 齋賀万智

このたびはすばらしい賞に選んでいただき、ありがとうございます。

私が短歌を始めたのは、最初に赴任した兵庫県立八鹿高校で出会った有本俱子先生からのお誘いでした。そして私を「心の花」に導いてくださったのが但馬歌会の足立勝歳先生でした。このお二方がいなければ、短歌を詠む「私」はきっとここにはいなかったでしょう。ましてや、このような賞をいただいている「私」も。今の世界はなんだか窮屈です。まるで正解が決まっているかのように、上からの指示が多くて大変です。そんな世界から少しだけ自由になるために、優しい息を吐くために、これからも三十一文字を紡いでいけたらと思います。